動的イメージ・メタファー表現の制約

パトリック・パーマー

1. はじめに

移動の類似性に基づいた比喩表現の中に、サキ領域とモト領域を表す語句（下線部AとBの箇所）のそれぞれの背景にあるメンタル・イメージ（以下「イメージ」と略す）が重力軸に対して移動の方向という点で一致しないものがみられる[1)]。

（1）　On the next drive,［A］Fiorenza shattered through Arundel's defensive line like ［B］a stone through ice for a 35-yard touchdown run.［1］（下線部は筆者による）

（1）では、アメフトの選手が、敵のディフェンシブ・ラインを抜けることは、石が氷を砕いて向こうへ進む移動に喩えられる。概念上では、「選手」と「石」のどちらも障害物を突き通す移動物である点で共通しているため、隠喩的写像の基盤が容易に見受けられる。しかし、両者に結びついているイメージに別個に注目すれば、重要な違いが確認できる。［A］の箇所は、選手が重力に対して水平方向に動くイメージを有する一方、［B］の箇所は、単独で石が凍結した湖や池を砕いて進むという、上から下、垂直方向に動くイメージが喚起されやすいといえそうである。その根拠として、我々の視覚経験では「石」が湖・池などの氷を突き通す経験が多いが、石が凍結した壁を砕くことは殆どないという事実が挙げられる。

以上の通り、イメージに相違点があるが、表現全体の意味は容易に汲み取れる。一方、重要なことに、これらの二つのイメージを文に明示すると、表現の容認度が低くなる。

（2）？ The player shattered through the defensive line like a stone through an iced-over lake.

また、（3）の通り、重力軸に対して垂直の「氷の壁」にすれば、容認度がまた高くなる。

（3）　The player shattered through the defensive line like a stone through a wall of ice.

（2）のような場合、当該比喩表現の根底にあるイメージを、表現上ではなぜ明示しにくいのだろうか。本稿では、（1）、（2）の容認度の差は、視覚及びイメージにおいて静的物体と移動物の認知のあり方の異同に根ざしていると主張する。Motion（移動）、Figure（移動するもの）、Ground（基準点となるもの）、Path（物体が移動する経路）、主に4つの要素からなるTalmy（1985）の「移動事象」の写像のあり方に注目し、議論を進める。特に、移動の基準点となるGroundの付加により、当該モト領域のイメージに含まれた物体が、回転可能なイメージから重力軸に縛られるイメージに変わると主張し、その法則により（1）、（2）のような比喩表現の容認度の差を説明する。なお、概念メ

タファー理論を理論的枠組とし、以上のような表現をイメージ・メタファーの現れ（以下IMと略す）として分析し、表現の背景にあるイメージ及びそのイメージが持つ認知的性質と、言語形式の関わりを探っていく。

（1）、（2）のような文の容認度には、少なくとも3つの要因が関わるように思われる。

①イメージの構造：モト・サキ領域のイメージが表面的に合うかどうか

②イメージに伴う身体化された認知：モト・サキ領域のイメージが重力の原理にどのように従うのか。例えば、「水が流れていくお風呂」と「乾いていく水たまり」という文から喚起されるイメージ は、水位が下がっていくという点で同様であるが、その要因は異なっており、「? 水たまりが栓を抜いたお風呂みたいに乾いた」という表現の容認度に影響を及ぼすと考えられる。

③文法による焦点化：モト・サキ領域のイメージが構文パターンによりどの部分が焦点化されるのか

①は静的事象を表すIMの課題であり、次節で後述する通り、多くの研究で注目されているが、②と③は、移動事象を表すIM独特の課題になると思われる。

以上の3要素が示すように、（1）、（2）の容認度の差は、意味と統語の相互作用で決定されると思われる。そのため、本稿は当該表現の根底にあるイメージと当該表現の構文パターンの両方に注目していく。また、研究対象は、モト領域の移動事象が直喩指標“like”や「ヨウ」を伴って直喩形式で明示されている表現とする。

2. 概念メタファー理論におけるIMの研究

本稿では（2）のような表現の容認度の低さは文の背景にあるイメージの性質に根ざしていると考える。そのため隠喩の理解と産出は認知的プロセスに根ざしているとみる概念メタファー理論を理論的枠組みとする。概念メタファー理論において、IMは、（4）のような形状や色彩など、感覚的類似性に基づいた隠喩のことである（Lakoff 1987, 1993, Lakoff and Turner 1989 ほか）。

（4）　白魚の指　ポニーテール　たらこ唇（（4）例は鍋島 2011 による）

（4）の例のように、モト領域のイメージ（白魚、仔馬のしっぽ、鱈子）とサキ領域のイメー ジ（指、髪の毛、唇）をつないで隠喩の写像を可能とするためには、イメージのメンタル・ローテーション、部分選択など、いくつかの認知機構が働いているとされている（鍋島 2011）。IMの理解・解釈過程は、二つのイメージが重なり合って融合されるとみるアプローチ（Lakoff 1987, Kövecses 2002 ほか）と、個々のイメージが別々に喚起され、その比較によって共通点が特定されるとみるアプローチ（Gleason 2009, Refaie 2015 を参照）がある。いずれにせよ、イメージの存在は（4）のような隠喩の産出・理解を可能とするとされ、その点が実験で裏付けられている研究もある（Gibbs and Bogdonovich 1999）。本稿でも、イメージが当該表現の理解に不可欠だという立場を取り、イメージの性質に注目する[2)]。

IMに注目した研究では、以上のようにモト領域・サキ領域のイメージが「静止」し

ているものが主な研究対象である。これを以下では「静的IM」と呼ぶことにする。感覚的類似性という点で関連しているのは、AとBの（空間）移動の類似性に基づいた隠喩である。このような隠喩は、AとBの形状などではなく、経路や移動の様態が類似していることを表す。中には、(5a-b) のような移動の様態を表すものと、(6) のような移動の経路を表すものがある。いずれも、(4) の例と同様に、感覚的類似性に基づいたものであり、動的イメージが表現の基盤にあるため、本稿では「動的IM」と呼ぶことにする。（以下、出典のない例文は複数の日本語話者のチェックを受けた作例である）

(5) a. サラリーマンが千鳥足で歩く。

b. 玄関に入ると、小さな子供たちが子犬のように走ってきた。

(6) 太郎はウサギが巣穴に入るように地下室に潜り込んだ。

(5a-b) と (6) のような例は、モト領域であるイメージの違いにより区別すべきである。(5a-b) の場合、「千鳥」と「子犬」の動きを知覚するため、移動物の方向性や空間関係を理解するのに必要な要素、つまり「基準点」はないが、(6) にある例は必ず「巣穴」、「地下室」という基準点を伴う。また、(5) にあるイメージは変化が生じないが、(6) は変化が生じる。例えば、「子犬のように」のイメージでは、「子犬」の動きが別個基準点となるものとの関係を通して理解されておらず、イメージにおいて動きの様態も継続可能である。それに対し、「ウサギが巣穴に入る」の文によって喚起されるイメージでは、ウサギの動きは「巣穴」が基準点になっており、「ウサギ」が巣穴に入る前後でイメージの性質が明確に変わるため、継続不可能であり、終結点があるといえる[3)]。

(5) にある、様態を表すものは、Grady (1999) では類似メタファーの一種で、習性に基づいた隠喩 (“behavior-based metaphors”) として位置づけられており、同様のものは、Ureña (2010) などでも議論されている。一方、(6) のような、移動物の経路や到着点など、移動事象の全体が写像されるIMのあり方に注目した研究はないようである。

以上の先行研究におけるIMの分析では、モト・サキ領域に属するイメージの性質は視覚情報の静的表象であり、まるで「頭の中の写真」のように議論されることもあるが、イメージは、モト領域とサキ領域が一致するように回転したり、部分的に選択したりするなど、様々な変形が起こる点で、「頭の中の写真」というより、トポロジー的な存在であるとみる論考がある (Lakoff 1987: p. 220)。

3. 本研究の立場

前節で概観した先行研究で扱われてきた静的IMに対して、動的IMは写像の動機付けと制限という点で大きく異なり、その変形も制限される可能性がある。動的IMの場合、写像の動機付けは表現の背景にあるイメージの表面的な重なり合いだけではない。主に物体の形状を重ねる静的IMとは異なり、移動の種類（使役移動か自立移動かなど）、移動の経路（出発点・到着点の有無など）も、モト領域とサキ領域で一致するか否かで隠喩表現の容認度に影響を及ぼし、隠喩が生み出す推意も左右する。

その中で、本稿は特にイメージにおける重力方向知覚の役割に着目したい。重力方

向知覚とは、ある移動事象に対し多様な視点が可能な場合、いずれも重力に対する関係が変わらないという認知機能を指す。Gibbs (2005) のように、イメージは、視覚に類似する表象（「頭の中の絵」）ではなく、より包括的に身体的経験が含まれるとすると、視覚的、運動的、その他感覚的経験から生まれる重力に対する理解は、イメージにおける移動を構造化していく上では必要不可欠であると考えられる。重力方向知覚は、文の理解にも寄与する。例えば、(1) のような文によって喚起されるイメージには、様々な視点が可能であるが、アメリカン・フットボールに慣れ親しんだ言語使用者であれば「水平方向」の動きとして認識すると考えられる。同様に「凍った湖を突破する石」によって喚起されるイメージも、様々な視点が可能であるが、多くの言語使用者は「垂直方向」の動きとして認識するであろう。本稿では、こうした重力に対する方向性が移動事象の隠喩の写像を制限すると主張する。但し、モト領域のイメージの焦点化が全体に及ぶか一部のみに留まるかにより、重力に対する関係が一致しなくて良い場合が生じる。

(5) と (6) の違いは、様態が写像されているか、移動事象が写像されているかだと考えられる。

動的IMの場合、モト領域が示される部分（以下では like 節かヨウ節と略す）は Figure のみが明示され、Ground 及び Path が省略される例が多い。この場合、モト領域の様態のみが写像される。

(7)　The children rolled down the hill <u>like barrels</u>.

一方、like 節・ヨウ節に Ground と Path (8a)、あるいはGround・Path・Motionが明示されることもある (8b-c)。

(8) a. John ran into the room <u>like a rabbit into its burrow.</u>（様態を示す動詞の省略）
　　b. John ran into the room <u>like a rabbit {running/runs} into its burrow.</u>
　　c. ジョンは<u>ウサギが巣穴に入るように</u>部屋に走り込んだ。

先述した通り、GroundやPathの省略の有無・容認度は、当該表現の根底にあるイメージの構造に左右される可能性がある。その構造に注目し、以下の制約を仮定する。

(9)　動的イメージ・メタファーのモト領域に属するイメージの Ground 及び Path が明示された場合、当該イメージがモト領域の重力軸に固定され、重力軸がサキ領域と一致しない場合は、モト領域とサキ領域のイメージは写像されない。

ここで重要なのは、静的IMとは異なり、GroundとPathに固定された、モト領域の移動事象を表す動的イメージでは、移動物の重力軸に対する移動方向が一致しなければならない点である。つまり、「石が凍結した湖を垂直方向に砕く」というイメージを、アメフトの選手の水平方向の動きのイメージに合わせることは難しいようである。重力軸に対し垂直方向に喚起された (3) の文の自然さに比べると、水平方向に喚起された (2) の容認度の低さからこの点は明らかになる。

4. 調査

本稿の仮説では、静的IMと移動の様態のみを表すIMは like 節・ヨウ節に現れる

対象物の重力軸に対する角度や移動方向が一致しなくて良い一方、移動事象（Path, Ground が示されているもの）を表すIMではモト領域とサキ領域とで対象物の重力軸に対する移動方向が一致しなければならないことが予測される。その制約がIMの使用実態に反映されているかを確認するため、英語及び日本語を対象に、動的IMの調査を行った。GroundとPathが示されているにも関わらず、重力軸で一致しない例が存在すれば、制約（9）の反証となる。

4.1 調査方法

like 節、ヨウ節に Ground と Path が明示される例は、主に小説など、書き言葉に関わるものが多いと予想したため、日本語のデータには現代日本語書き言葉均衡コーパス（BWCCJ）、英語のデータには、多くの書き言葉データが蓄積されている Corpus of Contemporary American English（COCA）を利用し、例を抽出した。英語のデータは以下の検索方法で集め、人手で例を分析し、移動に関わるもののみを分析対象とした。

（10） VERB through the *_n like / VERB across the *_n like

なお、下線部は、その他、out of, in, into, above, over, under, onto も検索対象とした。

日本語のデータは、以下の検索方法で例を集め、人手で例を分析し、移動に関わるもののみを分析対象とした。

（11）a. 名詞＋が＋名詞＋に＋動詞 語彙素 様（ウサギが穴に入るよう）

b. 名詞＋に＋動詞＋名詞＋の 語彙素 様（穴に入るウサギのよう）

なお、「に」の部分の他に、「へ」「から」「を」「より」「まで」も検索した。

英語のデータでは2,821例のうち比喩的用法でない例を除外し、2,171例を対象とした。そのうち、like 節で Path, Ground が省略されている例を除外し、結果合計 150例を分析対象とした。日本語のデータでは同様に782例のうち比喩表現でない例を除外し、結果合計62例を調査対象とした。

イメージの構造に注目し、動的IM表現のFigure, Ground, Path, Motionの明示の他にFigureが境界線を越えたかを調査した。本稿において、「境界線」は空間的な区切りを指し、それを越えることにより移動物が移動前後で異なる空間にいると認識できる対象をいう。なお、移動事象と動きの様態の認識様式の区別は文法による焦点化に左右されると推測したため、like節における動詞の有無及びあった場合の形を調査した。日本語の場合は、（12）のようにヨウ節の動詞が省略されにくく、また（13）のように動詞の形が変わることはなかった。そのため、語順が変わる場合に注目して調査した。

（12） ウサギが巣穴に {* ∅ / 走り込む} ように

（13） ウサギが巣穴に走り込んでいる / 走り込んだように

4.2 調査結果

英語のlike節で移動物が境界線を越えない（－境界）用例数と越えた（＋境界）用例数は表1である。

表1　like節における構文パターン

明示された要素	例	用例数
Figure, Ground, (Motion) Path (－境界)	like a dancer (twirling) across stage	89 (59%)
Figure, Ground, (Motion) Path (+境界)	like a dancer through the doorway	61 (41%)
		150

次に、動詞に注目し、like節における動詞が省略された場合が最も多く、その次にing形が用いられていた。-ed (“like a dancer twirled”) 形やnon-past形の使用がそれぞれ9例と2例に留まった。

表2　like節における動詞の形 (ジャンル別)

	FIC.	MAG.	NEWS	WEB	BLOG	ACAD.	TV	MOV.	SPOK.	用例数
省略	46	20	8	5	4	5	2	1	2	93
-ing形	28	8	2	3	2	2	1	1	0	47
-ed形	8	0	0	1	0	0	0	0	0	9
-s形	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2
	82	28	10	10	6	7	3	2	3	151

日本語の場合、動詞を中心にした用例 (タイプA) は12例で19%に留まり、名詞を中心にした例 (タイプB) は50例で81%になった。

表3 日本語データにおける用例数

	例	用例数
タイプA	ウサギが巣穴に走り込むように	12 (19%)
タイプB	巣穴に走り込むウサギのように	50 (81%)
	合計	62 (100%)

この結果から、英語では省略またはing形が好まれ、日本語では名詞を中心にしたタイプBの用法がよく用いられることが分かった。

本調査の結果、英語の150例中の148例、日本語の62例中の62例は移動物の移動方向が重力軸に対して一致している。次節では、英語の2例を分析し、(9) の制約の反証となるかを検討する。

5. 分析と考察

(14) では、サキ領域の移動物が事務室を横切る動きは、重力軸に対し水平方向であり、モト領域の移動物の垂直方向の動きに一致しないため、(9) の制約に反するようである。

(14)　Lindsey Graham marched across the office like a raven swooping down on its prey. (COCA, FIC, Heart Courage)

(14) の移動事象の全体がモト領域のイメージからサキ領域のイメージに写像されているのであれば、(9) の反証となる。しかし、移動物の様態のみが写像されている場合、本稿が仮定する制約の反例にならない。以下では、モト領域のlike・ヨウ節の動詞のアスペクトのあり方、また名詞のイメージの明白な境界線の有無に注目し、(14) のような例では様態のみが写像されるとことを主張する。

5.1　文法的テンス・アスペクトが動的IMの写像に及ぼす影響

(14) の容認度の高さは、like節における動詞の形による可能性がある。like節におけ

るswoopingのing形は、一般にテンスなしの解釈を促し、これは喚起するイメージのあり方に影響を及ぼす。以下の単文（15a, b）に結びついているイメージの構造がこの点を裏付けている。

(15)a. A raven swoops down on its prey.

b. A raven swooping down on its prey.

テンスを有する（15a）では、カラスが獲物という到達点に到着する所まで含まれるが、テンスなしの（15b）は、必ずしも含まれるとは限らない。すなわち、（15a,b）は移動事象全体を視野に入れるか途中の一部のみを視野に入れるかという焦点化の違いを含意する。（14）では、swoopingの使用により途中の様態のみが写像されるため、当該表現が（9）の制約にかからないと考えられる。そうすれば、（15a）と置き換えが不可能だという推測が立つが、現に、（16）の通りswooping を swoops と置き換えるのは比喩の容認度がかなり下がる。

(16)　Lindsey Graham marched across the office like a raven {swooping / ?swoops} down on its prey.（COCA, FIC, Heart Courage）

テンスの付加により、カラスが「獲物を取る」所を含め、移動事象の全体が焦点化され、対応する終結点がないサキ領域のイメージと衝突する。なお、swoopsの使用により、カラスの速さなどに注目したswoopingの様態寄り解釈から移動事象の全体を見た解釈に近づき、モト領域のイメージにおける移動物の「上から下へ」の方向性がより認知しやすく、主節における水平方向の動きと衝突しやすいと考えられる。（17）の通り、サキ領域の移動物を垂直方向の動きにすれば、swoopsの形でも容認度が上がる事実が、これを裏付ける。

(17)　Lindsey Graham dashed down the stairs like a raven swoops down on its prey.

日本語の場合でも、テンスの有無により似た意味解釈が生じる。例えば、新屋（2014）は「犬が吠える」は時間軸に縛られた出来事寄りの表現性がある一方、「吠える犬」ではアスペクトが捨象され、属性寄りの解釈が好まれるとしている。この違いは隠喩表現の解釈に反映される。（18a）ではイベント全体が写像され、（18b）ではウサギの様態（走るウサギの属性）が写像されている。

(18)a. ウサギが穴に入るようにジョンは地下室に走り込んだ。

b. ジョンは巣穴に入るウサギのように地下室に走り込んだ。

このように、like節における動詞の形により、モト領域のイメージの移動事象全体か途中の様態のみが写像されるかが変わり、それにより（9）の制約が働くかが決まると考えられる。

5.2　主節及びlike・ヨウ節における名詞が動的IMの写像に及ぼす影響

モト領域のイメージの移動事象全体と移動物の様態のどちらが写像されるかを決定する要因は、動詞のアスペクトのみではない。移動物がGroundにある境界線を越えるかも重要である。

(19)　[...] and lie there most of the night, eyes open wide, watching the shadows dance across the ceilings like tumbleweeds rolling across the desert. (COCA, WEB, slideshare.net)

(19) では、布団に入り仰向けになった人にとって、天井に揺れる影が、砂漠に転がる植物（回転草）のように見えることを表している表現である。動きのGround（「天井」と「砂漠の地面」）が明示されているにも関わらず、イメージが重力軸に従っていないため、(19) は一見 (9) の反例に見える。この例もlike節における動詞がing形になっており、写像されているのは移動事象でなく「回転草」の様態であるように思えるため、(9) の制約にかからないと考えられるが、(19)の容認度の高さは、Groundであるdesert（「砂漠」）の性質にもよるようである。「砂漠」という語が喚起させるイメージは明確な境界線を有さず、終結点はない。モト領域のGroundを「砂漠」から、視界に明確な境界線のある「道路」に置き換えると、同様の文が不自然になる事実は、この観察の根拠となる。

(20)？ The shadows dance across the ceiling like tumbleweeds rolling across a road.

(20) では、動詞 “across” と連動し、回転草が道路を横切るイメージが生じやすく、イメージは境界線を持ちやすくなり継続可能な「様態寄りの解釈」から終結点のある「移動事象寄りの解釈」に変わる。like節における動詞をalongに置き換え、「道路を横切る」でなく「道路に沿う」という移動事象として捉えにくい文にすれば、容認度が上がる。

(21)　The shadows dance across the ceiling like tumbleweeds rolling along a road.

このように、「Groundの明示」のみで「移動事象」解釈が促されるとは限らない。Groundの種類及び動詞のアスペクトの相互作用によりイメージにおける移動事象の終結点が生じやすかったり生じにくかったりすると考えられる。

5.1節、5.2節における反例の分析を踏まえ、(9) の制約は移動事象として認識されている場合のみに適用するようである。そのため、(9) の制約を以下の通り修正する。

(22)　動的イメージ・メタファーのモト領域に属するイメージの Ground 及び Path が明示された場合、当該イメージがモト領域の重力軸に固定され、重力軸がサキ領域と一致しない場合は、モト領域とサキ領域のイメージは写像されない。ただし、モト領域のイメージが移動全体ではなく、様態にのみ焦点を当てる場合は、モト領域のイメージは重力軸に固定されない。

「様態寄り」の解釈か「移動事象寄り」の解釈になるかは、以上で示した通り少なくともlike・ヨウ節における動詞のアスペクトとモト・サキ領域のGroundに明白な境界線があるかに左右される。

5.3　IMにおける移動事象の写像が制限される認知的な要因

モト領域・サキ領域に当たる移動事象と様態のイメージは、言語化に伴い重力軸に従って調整されなければならないようであり、広い意味ではLakoff（1993）などで提唱される不変性原理（“Invariance Principle”）に制限されているといえよう。不変性原理によれば、「隠喩的写像は、サキ領域の内構造に一致するようにモト領域の認知トポ

ロジー（すなわち、イメージ・スキーマの構造）が維持される」（1993: p.13）。しかし、静的イメージ及び様態を含んだイメージにおける認知トロポジーは、Groundや終結点など、移動の基準点を含んだ移動事象の動的イメージとは、なぜ異なるのだろうか。それぞれのイメージの背景にある異なる心理的経験が鍵になる可能性がある。

視覚において、網膜に映る物体のイメージは様々な角度や距離によって大きく異なってくるにも関わらず、同一の物体を同定しなければならない。物体のイメージのあり方もこの点を反映させており、視覚における物体同定とイメージにおけるメンタル・ローテーション（心的回転）の能力が緊密に結びついているとみる研究がある（Kosslyn 1994ほか）[4)]。言語におけるIM表現はこの点を裏付けている。例えば、「下向きの三日月のような髭」では、「三日月」に結びついた慣習的なイメージ（「☽」や「☾」）を回転させることにより、どのような髭の形をしているか判断できる（「⌒」）。

なお、視覚において移動物を様々な角度から重力軸に沿って同定しなければならない事がもう一点ある。例えば、ウサギが知覚者の方へ遠くから走ってきた場合「上から下」、知覚者の方から走っていく場合「下から上」のように、網膜に映るイメージは異なるが、迷うことなく比較的水平方向に動いていることは認識できる。その点でいえば、こうした視覚経験において、移動物は重力軸に固定されているといえる。我々のイメージにおいても、移動物も同様に重力軸に従う可能性がある。

言語理解において、「転がる回転草」のような表現はGround・基準点はなく、喚起されたメンタル・イメージは移動方向の変更が可能な「自由」なイメージである。また、Groundや到達点を付加することにより自由なイメージから、移動方向が固定され変更が不可能なイメージに変わる。このような要素によって重力軸に固定されるようになると、それぞれのイメージの比較・重なりが制限される可能性がある。

移動物の経路が重力軸に固定されており、サキ領域のイメージに合わせてそのイメージの基盤となる移動方向を心的に「回転」（メンタル・ローテーション）させることができないことは注目に値する。身体経験において重力軸に沿って構造化されている部分が多く、同様に言語理解において移動を表す比喩表現が重力軸に沿っていることが当然の結果かもしれない。しかし、これは、「頭の中の写真・映像」の分析では無視される点であり、動的IMにかかり、静的IMにかからない制約は、イメージにおける身体性に起因することが示唆される。

6. まとめ

本稿はイメージにおける重力方向知覚及び文法による焦点化の違いに注目して調査を行い、（22）の制約が得られた。本稿で以下の点が明らかになった。

1）移動事象が写像された動的IMは、Ground、Path を付加することにより静的IMには見られない制約が生じる。それは、Ground及びPathが明示された場合、当該イメージが重力軸に固定され、重力に対する方向が一致しないイメージは調整できないことである。

2）like節・ヨウ節における構文パターンや動詞のテンス・Groundの種類によって、

写像されるモト領域に属するイメージは終結点などを含む移動事象のイメージから様態のイメージに変わることがある。1）の制約の反例に見えるケースは、これによる。

本稿が挙げた制約は、人間の重力に対する認知によるものであるため、動的IM一般を制限すると推測できる。「様態寄りの解釈」と「移動事象全体の解釈」の区別をより精査しながら、他言語からデータを増やし、制約の一般性を確認することが次の課題となる。

注

1）本稿において、比喩は隠喩と直喩を包含し、一つの概念領域（サキ領域：target domain）がもう一つの概念領域（モト領域：source domain）を通して理解されるという認知プロセスを指す。対して、比喩表現とは、そのプロセスを反映する具体的な言語表現である。隠喩と直喩 は一般に「ヨウ」や “like” など、比喩性を明示する直喩指標の有無により区別される。（「男は狼だ」/ 男は狼のようだ）。また、モト・サキ領域のイメージとは、各文の下線部の箇所が喚起させるイメージを指す。

2）イメージはIM表現の理解に必要不可欠な要素でなく、付帯現象であると主張するCarston（2018）のような立場もある。

3）移動前後で視覚的に認識できる変化の有無による区別はFilipovic（2007）の移動表現の分析にも見られており、そこでは移動物が境界線を越える場合も、境界線に到達する場合も、変化のある移動事象として認識されると主張されている（p. 35）。

4）視覚とイメーシのつながりについて、Kosslyn & Thompson（2000）, Kosslyn et al.（2006）を参照。

参考文献

Carston, B.（2018）. “Figurative language, mental imagery and pragmatics.” *Metaphor and Symbol*, 33: pp.197-217.

El Refaie, E.（2015）. “Reconsidering “Image Metaphor” in the Light of Perceptual Simulation Theory.” *Metaphor and Symbol*, 30（1）: pp.63-76

Filipovic, L.（2007）. *Talking about motion: A crosslinguistic investigation of lexicalization patterns.* Amsterdam: John Benjamins.

Gibbs, R.W., Jr.（2005）. *Embodiment and Cognitive Science*. Cambridge University Press.

Gibbs, R.W., Jr. and Bogdonovich, J.（1999）. “Mental Imagery in Interpreting Poetic Metaphor.” *Metaphor and Symbol*, 14（1）: pp.37-44

Gleason, D.W.（2009）. “The Visual Experience of Image Metaphor: Cognitive Insights into Imagist Figures.” *Poetics Today.* 30（3）: pp.423-470.

Grady, J.（1999）. A typology of motivation for conceptual metaphor: Correlation vs. resemblance. In R.W. Gibbs and G. Steen（Eds.）, *Metaphor in Cognitive Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. pp.101-123.

Kosslyn, S.（1994）. *Image and Brain: The Resolution of the Imagery Debate.* MIT Press.

Kosslyn, S., Thompson, W.L., and Ganis, G.（2006）. *The Case for Mental Imagery.* New York: Oxford University Press.

Kosslyn, S. & Thompson, W. L.（2000）. Shared mechanisms in visual imagery and visual perception: Insights from cognitive science. In M.S. Gazzaniga（Ed.）, *The cognitive neurosciences (2nd ed.)*. Cambridge, MA: MIT Press.

Kövecses, Z.（2002）. *Metaphor: A practical introduction*. Oxford, UK: Oxford University Press.

Lakoff, G.（1987）. "Image Metaphors." *Metaphor and Symbolic Activity*, 2（3）, pp. 219-222.

Lakoff, G.（1993）. The contemporary theory of metaphor. In A. Ortony（Ed.）, *Metaphor and thought*. Cambridge University Press. pp.202-251.

Lakoff, G. & Turner, M.（1989）. *More than cool reason: A field guide to poetic metaphor*. Chicago: University of Chicago Press.

鍋島弘治郎（2011）『日本語のメタファー』くろしお出版.

新屋映子（2014）『日本語の名詞指向性の研究』ひつじ書房. pp.215-245.

Talmy, L.（1985）. Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. In *Language Typology and Syntactic Description Vol.3*, T. Shopen（ed.）, pp.57-149. Cambridge: Cambridge University Press.

Ureña Gómez-Moreno, J. M. and Faber, P.（2010）."Reviewing imagery in resemblance and non-resemblance metaphors." *Cognitive Linguistics*, 21: pp.123-149.

【使用データ】

［1］Fominykh, K. "'We're going to Navy`: Dundalk football blows out Arundel, 40-6, in 4A/3A state semifinal." CapitalGazzette.com. Nov. 27, 2021.（最終閲覧日 2022年6月27日）

［2］Davies, Mark.（2008-）The Corpus of Contemporary American English（COCA）. Available online at https://www.english-corpora.org/coca/.

［3］国立国語研究所 現代日本語書き言葉均衡コーパス（中納言）2.4.5 データバージョン2021.03 https://chunagon.ninjal.ac.jp

謝辞

本稿の一部は、第44回福岡認知言語学会での口頭発表に基づいている。発表に際し、会場の方々から多くの有意義な助言を頂戴した。また、本稿の執筆にあたり、3名の匿名査読者の先生方及び日頃よりご指導を賜る江口正先生から貴重なコメントをいただいた。ここに記して感謝を申し上げたい。

（津山工業高等専門学校）